

## 岩手県における伝統的民家の間取りの成立・発展と地域的展開 － 2列型を主に－ (Ⅱ)

高橋 宏 一

1. はじめに
2. 分析の視点と分析方法
3. 1列型間取りの成立・発展と地域的展開
4. 2×1型間取りの成立・発展と地域的展開
5. 1×2型間取りの成立・発展と地域的展開
6. 2×2型間取りの成立・発展と地域的展開 (以上前号)
7. 3×2型間取りの成立・発展と地域的展開 (以下本号)
8. 2×3型間取りの成立・発展と地域的展開
9. 3×3型間取りの成立・発展と地域的展開
10. 2列型間取りの成立・発展と地域的展開－まとめにかえて－

### 7. 3×2型間取りの成立・発展と地域的展開

#### (1) 広間タイプ

##### ①室呼称に基づく広間タイプ

3×2型の間取り図は29図あるが、下手列の室呼称から広間タイプを判断すると、奥広間はなく、中広間が25図で、前広間が4図であった。

中広間と判断した25図の中広間の室呼称は、オカミ (オガミを含む) が15図と最も多く、チャノマが5図、ジョウイが3図であった。前室の呼称は、ナカマが17図と約2/3を占めている。前室呼称がイマ、チャノマ、ダイドコロの図もあるが、それらの中室の呼称はジョウイである、中室にのみ炉がある、中室が前室より広いなどの理由で、中室を広間と判断した。また、中広間の奥の室は、カッテが8図で最も多いが、他はナンド、ネマなどの寝室・収納室で占められている。奥室がカッテの図はすべて東磐井郡にあるが、注10に記したように、東磐井郡や気仙郡周辺地域のカッテは、いわゆる勝手ではなく、ナンドに相当すると考えられる。このように、中広間タイプの場合、基本的に前室は次の間で、奥室は寝室または収納室になっている。

前広間の4図のうち3図 (民番32, 498, 595) は、前広間の奥にネベヤ、ナンド、オク等の寝室が2室配置されている。前室の呼称は、各々ナカザシキ<sup>14)</sup>、ジョウイ、イマであった。残

---

14) ナカザシキは、一般的には広間呼称ではないが、東洋大学民俗研究会編 (1983 p.110) には、民番32と同じ軽米町内の民番34 (ただし、2×2型) のナカザシキについて、以前はダイドコロと呼び、食事を作ったり、

り1図（民番245の岩手郡玉山村堀江家）の前室呼称は下ジョウイ、中室が上ジョウイ、奥室がヒヤであるが、上ジョウイの広さは下ジョウイの半分であることや、玉山村の他の型も含む全28図を見ると、全広間が4図あるが奥広間や中広間はまったくなく、他はすべて前広間であることから、この図も前広間と判断した。

## ②構造図の下手列の判別分析

室呼称に基づく広間タイプの判断の妥当性を確認するために、 $3 \times 2$ 型の17構造図を対象に、下手列3室に関連する10の室開放度および下手列前室および奥室の相対的広さの計12変数を用いて、広間タイプを目的変数（グループ）とする判別分析を行った。17構造図中、呼称に基づく広間タイプは前広間が1図のみで、他16図はすべて中広間だったこともあって、予測の一致率は100%であった。

なお、下手列3室の場合の広間タイプ別の室開放度等については、 $3 \times 2$ 型の構造図数が少なく、広間タイプも2タイプしかないため、ここでは省略し、 $3 \times 3$ 型間取りで検討することにする。

## ③広間タイプの地域的展開

中広間を分布を見ると（後出の表20参照）、25図中20図は旧伊達藩領にあり、しかも東磐井郡に14図、その中でも室根村に7図が集中している。一方、旧南部藩領では、九戸郡、岩手郡、紫波郡、下閉伊郡に分散的に見られるにすぎない。

旧伊達藩領の中広間の室呼称は、オカミが15図、チャノマが5図で、前室はほとんどがナカマ、奥室はカッテが8図、ナンドが4図、ウラザシキが4図となっている。中でも東磐井郡にみられる典型的な室呼称は、同郡の $2 \times 2$ 型の前広間タイプの「カッテ/オカミ」と奥広間タイプの「オカミ/ナカマ」の両者の呼称が組み合わせられた「カッテ/オカミ/ナカマ」で、8図がこれに該当する。この典型的な室呼称は、室根村以外では、隣接する東磐井郡大東町、千厩町、藤沢町にも多少見られる。また、後述する $3 \times 3$ 型でも、「カッテ/オカミ/ナカマ」は、室根村をはじめとする東磐井郡に広がっている。

一方、前広間は4図しかなく、その分布は旧南部藩領の九戸郡、岩手郡、上閉伊郡、旧伊達藩領の胆沢郡に分散している。

## (2) 座敷タイプ

### ①室呼称に基づく座敷タイプ

上手列の室呼称から、前座敷と判断したのは29図中16図で、前室呼称はデイとザシキにほぼ二分されるが、その奥室呼称はすべてナンドである。一方、鍵座敷と判断したのは13図で、ほとんどが前室、奥室ともに「ザシキ」が付く呼称であり、前室にはザシキの前にシモ（シタ）、オモテ、奥室にはカミ（ウエ）、オクが付く呼称が多い。なお、室呼称からは、奥座敷と判断された図はなかった。

### ②構造図の上手列の判別分析

17の構造図について、上手列2室の開放度8変数および上手列前室の相対的広さの合わせて

---

食べたりしており、現在のガイドコロは、以前はニワで作業場として使用していたと記されている。民番32も旧土間部にガイドコロがあるため、ナカザシキを広間と判断した。

9変数を用いて、座敷タイプを目的変数（グループ）とする判別分析を行った。その結果、前室・奥室間および奥室側面の開放度が高いのが鍵座敷で、それらが低いのが前座敷と予測され、鍵座敷8図、前座敷9図すべて正しく予測された。なお、座敷タイプ別の室開放度等の特徴については、2×2型の場合と基本的に同じであった。

③座敷タイプの地域的展開

前座敷は旧南部藩領にはなく、旧伊達藩領の胆沢郡と東磐井郡に集中している（後出の表20参照）。前室の座敷呼称はデイとザシキが混在しているが、デイは特に東磐井郡室根村に多く見られる。鍵座敷は旧南部藩領に分散して分布しているが、東磐井郡にも多少みられる。

(3) 間取りタイプ

①間取りタイプとその地域的展開

広間タイプと座敷タイプの組み合わせにより、3×2型の29図の間取りタイプは、中広間前座敷（15図）と中広間鍵座敷（10図）にはほぼ二分された。表20にそれらの旧郡別分布を示した。

旧伊達藩領では、中広間前座敷が15図と最も多く、2×2型では奥広間が卓越する東磐井郡と胆沢郡に集中しているが、中広間鍵座敷も5図ある。一方、旧南部藩領には中広間前座敷はなく、中広間鍵座敷が5図、前広間鍵座敷が3図あるのみで、いずれも2×2型では前広間が卓越する地域に分散して分布している。

表20 3×2型の旧郡別間取りタイプ別間取り図数

旧郡	前広間 鍵座敷	前広間 前座敷	中広間 鍵座敷	中広間 前座敷	合計
九戸郡	1	0	1	0	2
岩手郡	1	0	1	0	2
紫波郡	0	0	2	0	2
下閉伊郡	0	0	1	0	1
上閉伊郡	1	0	0	0	1
胆沢郡	0	1	0	4	5
西磐井郡	0	0	1	1	2
東磐井郡	0	0	4	10	14
合計	3	1	10	15	29

②構造図の間取りのクラスター分析

判別分析で使した下手列と上手列の室開放度および室の相対的広さに関わる17変数を使用して、17構造図の間取りのクラスター分析を行った。その結果、中広間前座敷と中広間鍵座敷に該当する2つのクラスターに大きく二分され、さらに後者は2つのクラスターに細分されて、計3つのクラスターに分類された。表21に呼称に基づく間取りタイプと3つのクラスターとの関係を、表22には各クラスターの17変数の平均値等を示した。

表21 3×2型の間取りタイプとクラスターとの関係

間取り タイプ	第1クラ スター	第2クラ スター	第3クラ スター	合計
前広間 鍵座敷	0	1	0	1
中広間 鍵座敷	0	5	2	7
中広間 前座敷	9	0	0	9
合計	9	6	2	17

17の構造図のうち、9図ある中広間前座敷はすべて第1クラスターに含まれ、7図ある中広間鍵座敷は他2つのクラスターに分割された。

第1クラスターと他2つのクラスターとの大きな違いは、座敷タイプの違いによる上手列奥室の閉鎖性にある。上手列奥室が寝室となる前座敷では、上手前室・奥室間と上手奥室側面が極めて閉鎖的なのに対して、奥室も座敷である鍵座敷タイプでは、逆に開放的である。

一方、第2クラスターは、鍵座敷タイプでも中広間とそれをとりまく4室との間の開放度の平均が、下手列前室との間が約90%である以外はいずれも30%以下と閉鎖的なのに対して、第

表22 3×2型のクラスター別室開放度と室割合

クラスター	下手前室・中室間	下手中室・奥室間	下手前室 前面	下手前室 側面	下手中室 側面	下手奥室 側面	前室 相互	奥室 相互	下手中室・上手前室間
1	93.3	75.0	97.8	94.1	73.4	66.7	86.7	80.6	56.6
	10.0	31.2	6.7	12.1	16.9	43.3	16.3	39.1	44.5
2	88.8	27.7	100.0	100.0	82.8	100.0	100.0	0.0	0.0
	8.7	42.9	0.0	0.0	14.9	0.0	0.0	0.0	0.0
3	100.0	100.0	100.0	0.0	50.0	87.5	100.0	50.0	100.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.7	0.0	70.7	0.0
合計	92.5	61.3	98.8	85.1	74.0	80.9	93.0	48.5	41.7
	9.3	42.2	4.9	33.3	17.7	34.8	13.4	50.4	46.8

クラスター	下手中室・上手奥室間	上手前室・奥室間	上手前室 前面	上手前室 側面	上手奥室 側面	下手前室 割合	下手奥室 割合	上手前室 割合	図数
1	16.7	14.4	81.9	51.8	3.7	34.3	19.8	67.6	9
	35.4	22.4	16.8	36.9	11.0	6.8	4.9	7.4	
2	20.0	100.0	100.0	50.0	67.6	39.5	19.1	37.9	6
	31.0	0.0	0.0	54.8	17.0	8.2	1.0	9.1	
3	50.0	100.0	100.0	100.0	100.0	34.8	24.7	55.0	2
	70.7	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1	3.6	7.1	
合計	21.8	54.7	90.4	56.8	37.6	36.2	20.1	55.6	17
	36.8	46.8	15.1	43.4	40.3	7.1	4.1	16.0	

(上段：平均 下段：標準偏差 図数以外の単位は%)

3クラスターの中広間と他4室との開放度の平均は、上手列奥室との間が50%であることを除いてすべて100%であり、まさに広間が間取りの中心的位置を占めている。地域的にも第2クラスターの5図(民番708, 732, 761-1, 761-2, 875)は、いずれも旧伊達藩領の奥広間地域に分布しているのに対して、第3クラスターの2図(民番20, 368)は旧南部藩領の前広間地域である九戸郡と下閉伊郡に分布している。このように、旧伊達藩領と旧南部藩領とでは、というよりは奥広間地域と前広間地域とでは、同じ中広間鍵座敷の間取りでも構造的には大きな違いがあるため、中広間鍵座敷の発生プロセスも異なる可能性がある。これについては、次節で再度取り上げることとする。

### ③ 3×2型間取りの成立と発展

3×2型間取りは、2×2型の下手列を3室にすることによって生まれたと考えられる。下手列を3室化するには、既存の広い室(広間)を二分する、あるいは背面に室を増築する方法が考えられる。

現状図が中広間前座敷で、かつ復原図もある民家4戸を見ると、いずれも旧伊達藩領東磐井郡に存在し、そのうち3戸の復原図は2×2型の奥広間前座敷であった。室根村菊地家の現状図(民番758-1)では、広間にあたるチャノマが2室に仕切られて、奥にウラザシキが設けられている。藤沢町千葉家(民番800-1)では、元のおカミが二分されて、奥にコザシキが設けられ、藤沢町沼倉家(民番801-1)でも、元のおカミが二分され、奥にカッテが設けられている。また、藤沢町伊藤家は、復原図(民番772-2)は2×1型の奥広間全座敷だったが、現状図(民番772-1)では奥に下屋が増築され、下手列のおカミと上手列のザシキの奥に共にナンドが置かれ、中広間前座敷に移行している。

このように、これら4図はいずれも下手列2室の奥広間タイプから、広間奥に寝室・収納室

を配した3×2型の中広間前座敷に移行している。東磐井郡およびその地域周辺の2×2型間取りは、奥広間前座敷が一般的であることから、この地域の3×2型中広間前座敷は、奥広間タイプ（特に2×2型の奥広間前座敷）から発展して生まれたと言えるだろう。2×2型の奥広間前座敷には寝室が1室しか無いため、二組以上の夫婦がいるなどの理由による複数の寝室・収納室の必要性の高まりに伴って、広間奥に新たな寝室・収納室を設ける中広間化が進んだものと考えられる。

図数は少ないが、形式的には寝室が無い2×2型の奥広間鍵座敷にも、中広間化したものがあると考えられる。2×2型の奥広間鍵座敷から3×2型の中広間鍵座敷に移行した事例は認められなかったが、2×2型奥広間鍵座敷にみられる田の字型の形態的特徴が、第2クラスターの中広間鍵座敷にも認められる。第2クラスターの下手前室割合と上手前室割合がいずれも約40%であることが示しているように、下手列前室、中室・奥室、上手列前室、奥室の4空間は、ほぼ田の字型に配置されていることから、田の字を維持したまま元の奥広間を二分したか、背面に増築することによって中広間鍵座敷が生まれた可能性がある。ただし、2×2型奥広間鍵座敷が上閉伊郡、稗貫郡から気仙郡、東磐井郡にかけての前広間地域と奥広間地域の境界地域に分布しているのに対して、中広間鍵座敷はほぼ東磐井郡に限られており、はっきりとしたことは分からない。

一方、前述したように、前広間地域にも中広間鍵座敷が5図（民番20, 194, 331, 349, 368）分布している。いずれも下手列奥は寝室で、前室呼称は前二者がダイドコロ、中二者がチャノマ、後一者が小室2室のロクジョウとサンジョウとなっている。これらの周辺地域では、2×2型の前広間鍵座敷が主であることから、前広間が二分されて3室化した可能性がある。実際民番349（紫波郡紫波町某家）を調査した杉本（1969 p.89）によると、下手列前室にある畳敷きのチャノマは、かつては中室のジョウイと続いており、板の間であったと言う。間取り図をみても、チャノマとジョウイの間が破線で示され、他の間仕切りの実線とは区別して表現されている。前広間を中広間と次の間に二分したのは、上手列の2座敷とあわせてL字型の座敷配置を目指したのかもしれない。また、前節でのクラスター分析の結果から明らかになったように、構造図の民番20および民番368の間取り構造は、奥広間地域の中広間鍵座敷とは異なっている。これらのことから、中広間タイプの発生には、前広間系と奥広間系の2つの異なる系統があると考えられる。

以上みてきたように、下手列を3室にするのは、主に新たに寝室・収納室を設けるためだが、その際、室機能の特性上、広間の奥に置かざる得ない。このため、3×2型には奥広間タイプがみられないのであろう。また、3×2型は、2×2型の奥広間地域に多く、前広間地域には少ない。2×2型の奥広間タイプでは、寝室が1室のみまたは寝室が無い場合、新たな寝室・収納室に対する欲求が高まることで、下手列の3室化が進んだと考えられる。それに対して前広間タイプでは、最も多い鍵座敷タイプの場合でも寝室があり、また、新たな寝室への欲求が高まっても、2室ある座敷の一方を実質的に寝室等に転用できる可能性が高いため、下手列の3室化はあまり進まなかったと考えられる。

## 8. 2×3型間取りの成立・発展と地域的展開

### (1) 広間タイプ

#### ①室呼称に基づく広間タイプ

表23に示したように、2×3型の151図のうち、下手列の室呼称から前広間と判断したのは45図で、奥広間の106図の半数以下と少なく、2×2型では前広間の方がかなり多かったのとは対照的である。45図の前室の呼称はほとんどが広間呼称で、最も多い「ジョイ」が8割近い35図を占めている。一方奥室は、ほとんどがネベヤ、ネドコ、ナンド等の寝室呼称である。なお、室呼称が不明な図については、炉の有無、室の広さ、間取り図の出典の記述等から広間タイプを判断した。

ただし、前広間の室呼称がナカマの図が、西磐井郡平泉町に2図（民番704, 705）ある。民番704は、奥室呼称がナンドであるため、ナカマを広間と判断した。また、民番705（高橋家）について、加藤・平出（1942 p.54）には、奥室の「オカミ」はまた別に「ネマ」とも云ひ、寝所である」とあると記載されている。さらに、高橋家ではナカマの方が広く、炉もナカマにはあるがオカミにはないため、前広間と判断した。次に、民番549（和賀郡沢内村川村家）は、奥にデエドコがあり、前はジョエ・ネドコの間仕切り無しで、ネドコが土間側、ジョエが上手列側にある。この間取りは、西和賀地方の3列型民家に多くみられる。西和賀地方の近世民家を調査した羽柴（1993 p.89）によると、同様の間取りにおけるダイドコロは居間といった日常生活の空間で、ジョイは神棚が置かれ接客のための空間であると言う。さらに、同様の3列型の間取りでは、奥室のダイドコロにあたる室をジョイ、前のジョイにあたる室をイマと呼ぶ間取りも複数みられ、同じ地域内でも室呼称は統一的でなく、特に「ジョイ」が広間を指す場合と客間を指す場合が混在している。3列型間取りの分析については稿を改めたいが、室呼称が違ってこれらはいずれも実質的には奥広間と判断されるので、川村家も奥広間と判断した。

一方、残りの106図は、奥広間と判断した。前室呼称は、大半がナカマ（91図）だが、チャノマも9図あった。奥室の呼称は、オカミ（67図）、「ジョイ」（25図）、チャノマ（12図）に三分された。また、呼称の組み合わせでは、奥室がオカミまたはチャノマの場合、前室はほとんどがナカマであるが、奥室が「ジョイ」の場合の前室呼称は、ナカマとチャノマにほぼ二分された。

表23 2×3型の広間タイプ別室呼称

#### ①下手列前室

室呼称	前広間	奥広間	合計
ジョイ	35	0	35
チャノマ	1	9	10
ナカマ	2	91	93
その他	4	4	8
不明	3	2	5
合計	45	106	151

(注)「ジョイ」は、ジョウイ、ジョエ等を含む  
「ナカマ」は、ナカノマ等を含む

#### ②下手列奥室

室呼称	前広間	奥広間	合計
ネマ	36	0	36
ジョイ	0	25	25
オカミ	1	67	68
チャノマ	0	12	12
その他	5	1	6
不明	3	1	4
合計	45	106	151

(注)「ネマ」は、ネベヤ、ネドコ、ナンド等を含む

## ②構造図の下手列の判別分析

2×3型の105構造図を対象として、下手列2室の開放度8変数および前室の相対的広さの合わせて9変数を独立変数、広間位置を目的変数（グループ）とする判別分析を行った。その結果、1図（前出の民番705の高橋家）を除いて正しく分類され、判別率は99.0%であった。

前述したように、高橋家の奥室呼称はオカミだが、ネマとも呼ばれ、実質的には寝室であると言う出典の記述に基づいて、呼称からは前広間と判断したが、判別分析では奥広間と予測された。2×3型の前広間タイプの奥室相互、下手奥室・上手中室間の開放度の平均は、共に10%以下であるが、高橋家では共に100%であった。奥室側面の開放度も前広間タイプの平均35.8%に対して、高橋家では100%であった。つまり、高橋家は、元々は以前のオカミの呼称通り奥室が広間だったのが、何らかの理由でその機能を前室のナカマに移し、オカミは寝室として利用され、ネマと呼ばれるようになったが、室間の開放関係を変えるような改修をしなかったと推測される。

なお、広間タイプ別の室開放度等の特徴については、2×2型の場合と基本的に同じなので、省略する。

## ③広間タイプの地域的展開

2×3型の広間タイプの地域的分布を見ると（後出の表26参照）、ほぼ南北に前広間と奥広間に二分される。

前広間は旧南部藩領内陸部の二戸郡、岩手郡、紫波郡に集中し、2×2型では前広間が卓越する沿岸部の下閉伊郡や旧伊達藩領気仙郡には見られない。室呼称の組み合わせは、2×2型の場合とほぼ同じで、「ネマ/ジョイ」が多くを占めている。なお、西磐井郡平泉町にも、前広間が2図（前出の民番704と705）あるが、いずれも例外的と見なして良いであろう<sup>15)</sup>。

奥広間は、旧伊達藩領の胆沢郡、西・東磐井郡を中心に、旧南部藩領の稗貫郡や和賀郡にも広がっており、2×2型の奥広間の分布パターンとほぼ同じである。室呼称の組み合わせも2×2型とほぼ同じで、旧伊達藩領では「オカミ/ナカマ」が68図で最も多いが、東磐井郡（特に藤沢町）では、「チャノマ/ナカマ」（10図）もみられる。一方、旧南部藩領でも2×2型の場合とほぼ同様の室呼称だが、「ジョイ/チャノマ」（9図）よりも、前広間タイプと奥広間タイプの呼称が混じり合った「ジョイ/ナカマ」（14図）の方が多く、特に後者は稗貫郡、和賀郡に集中して分布している。

## (2) 座敷タイプ

### ①室呼称に基づく座敷タイプ

座敷タイプ別の室呼称を表24に示した。151図の中で、室呼称から3室とも座敷である鍵座敷と判断されたのが17図<sup>16)</sup>あった。過半の図では、それぞれシタ、ナカ、オクやカミなどの

15) 民番704は旧伊達藩領では珍しい内厩で、かつ曲家である。ただし、今野（2008 p.51）によると、いわゆる南部曲家ではなく、内厩直家にこなし場（作業場）になっている突出部がくっついたものであると言う。

16) 17図中、室呼称が不明なのが3図ある。民番77-1（二戸郡一戸町中村家）は3室とも呼称が不明であるが、いずれも畳間で、東北大学建築学科佐藤巧研究室編（1978 p.122）によると、その復原図（民番77-2）の上手列2室はともに座敷だが、その現状図である民番77-1では前の座敷を二分して3室にしているため、3室とも座敷と判断した。民番287（岩手郡雫石町松原家）も3室とも呼称が不明だが、佐藤巧・古建築研究会編（2005 p.66）に、三座敷構成との説明があるため、鍵座敷と判断した。また、民番104（二戸郡安代町三浦家）では、中室の呼称が不明だが、奥室の座敷と同様に側面に縁が付いているので、中室も座敷と判断した。

表24 2×3型の座敷タイプ別室呼称

## ①上手列前室

室呼称	鍵座敷	前座敷	奥座敷	中座敷	合計
シタザシキ	8	9	0	0	17
ザシキ	1	10	0	0	11
他ザシキ	4	13	0	0	17
デイ	0	50	0	0	50
キバ	0	18	0	0	18
ネマ	0	1	17	4	22
その他	2	5	4	0	11
不明	2	1	2	0	5
合計	17	107	23	4	151

(注)「シタザシキ」は、シモザシキを含む  
「他ザシキ」は、マエザシキ、コザシキ等を含む  
「デイ」は、コデイ等を含む  
「ネマ」は、ネベヤ、ネドコ等を含む

## ②上手列中室

室呼称	鍵座敷	前座敷	奥座敷	中座敷	合計
オクザシキ	0	8	0	0	8
カミザシキ	0	10	0	0	10
ナカザシキ	10	2	2	0	14
シタザシキ	3	0	10	0	13
ザシキ	0	23	5	4	32
他ザシキ	0	6	0	0	6
デイ	0	26	0	0	26
キバ	0	20	0	0	20
トコノマ	0	6	0	0	6
ネマ	0	2	2	0	4
その他	1	3	3	0	7
不明	3	1	1	0	5
合計	17	107	23	4	151

(注)「カミザシキ」は、ウエザシキ、ウワザシキを含む  
「シタザシキ」は、シモザシキを含む  
「他ザシキ」は、コザシキ、ホンザシキ等を含む  
「デイ」は、オオデイ、オオデ等を含む  
「キバ」は、キバザシキ等を含む  
「トコノマ」は、トコマを含む  
「ネマ」は、ネベヤ等を含む

## ③上手列奥室

室呼称	鍵座敷	前座敷	奥座敷	中座敷	合計
オクザシキ	6	1	1	0	8
カミザシキ	6	0	5	0	11
ザシキ	3	0	12	0	15
他ザシキ	0	0	1	0	1
ナンド	0	88	0	1	89
ネマ	0	12	0	2	14
その他	0	6	3	0	9
不明	2	0	1	1	4
合計	17	107	23	4	151

(注)「カミザシキ」は、ウエザシキ、ウワザシキを含む  
「ネマ」は、ネベヤ、ヘヤ等を含む

座敷位置を示す呼称がつけられている。なお、室呼称にデイやキバがついた図は一つもなかった。

次に、前座敷と判断したのは107図で、うち座敷が1室で、奥の2室が寝室なのは2図（民番129, 804）のみで、他はすべて前側2室が座敷で、奥1室が寝室・収納室となっている。前室の呼称は「デイ」（コデイ等を含む）が50図、ザシキが付く呼称が32図、キバが18図で、中室の呼称は「デイ」（オオデイ等を含む）が26図、ザシキが付く呼称が49図、キバが付く呼称が20図であった。奥室の呼称はナンドが88図と圧倒的に多く、「ネマ」（ネベヤ、ヘヤ等を含む）は12図であった。なお、民番773-1（東磐井郡藤沢町岩淵家）の奥室は、オクザシキと呼称され、その前の中室もオクザシキであるが、両室の間には壁があって往来不可である。つまり、奥のオクザシキは明らかに寝室と考えられるので、岩淵家は鍵座敷ではなく、前座敷と判断した。

奥座敷と判断したのは23図<sup>17)</sup>で、前室呼称はほとんどがネドコ、ネベヤ、ネマ、モノオキ

17) 室呼称が不明の室がある岩手郡雫石町の2図（民番280熊野家, 281黒沢家）については、床の間の位置や室側面の縁の有無等で判断した。また、岩手郡雫石町滝沢家（民番282）は、前室のチュウモンが突出している両中門造風の曲家だが、文化財保護委員会編（1965 p.51）によると、チュウモンは調査時点では物置として使用されていたので、奥座敷と判断した。



などの収納・寝室空間を示す呼称であった。前室以外の奥の2室は基本的に座敷であるが、座敷は最奥の1室のみで、中室も寝室であるのが2図（民番165, 326）あった。これ以外の奥室および中室の呼称は、共にほとんどがザシキが付く呼称で、デイやキバが付く呼称は一つもなかった。

最後に、中室のみが座敷で、前室と奥室は寝室・収納室である中座敷が、4図あった。うち1図（民番181）は前広間で、背面に下屋を増築して、奥に新たに室を設けたような形態の間取りになっている。残り3図（民番508, 513, 525）は奥広間中座敷で、共に床の間は中室にしかない。

## ②構造図の上手列の室開放度と判別分析

上記のように、座敷と寝室等の配置状況から2×3型の座敷タイプは4つに分かれた。表25には、105構造図について座敷タイプ別の上手列各室の開放度および前室と奥室の相対的広さの計12変数の平均値と標準偏差を示した。大まかに見ると、鍵座敷と奥座敷、前座敷と中座敷の2つのグループに分けることができる。前者は、奥室の座敷が広く、中室との間も100%開放されている。奥室側面もかなり開放的だが、下手列奥室との間はほぼ閉鎖されている。それに対して後者では、寝室・収納室である奥室は狭く、中室との間は閉鎖的である。奥室側面もほぼ閉鎖されているが、下手列奥室との間はある程度開放されている。

また、形態図も含めて床の間がある間取り図を見ると、鍵座敷と奥座敷では、床の間は100%奥室にあるが、前座敷の場合は、85図中79図は中室に有り（うち5図は中室と前室の両方にある）、前室のみにあるのは6図にすぎない。中座敷では3図すべて中室にある。

これらのことから、2×3型の座敷タイプは、間取り構造的には鍵座敷および奥座敷の系統と前座敷および中座敷の2つの系統に分かれる可能性が高い。が、この点については、広間タイプも関係するので、(3)の間取りタイプの節でも検討する。

次に、室開放度が一部不明な1図を除いた104図を対象に、上記12変数を用いて、4座敷タイプを目的変数（グループ）とする判別分析を行った。その結果、正しく予測されたのは98図で、判別率は94.2%であった。正しく予測されなかった6図は、いずれも鍵座敷と奥座敷に関連している。

まず、室呼称からは奥座敷と判断されるのに、前室のネベヤが開放的なため、鍵座敷と判別されたのが、岩手郡（民番280）と紫波郡（民番330）にあった。逆に、鍵座敷なのに、前室の

表25 2×3型構造図の座敷タイプ別上手列の室開放度と室割合

座敷タイプ	前室・中室間	中室・奥室間	前室前面	前室側面	中室側面	奥室側面	前室相互	奥室相互	下手前室・上手中室間	下手奥室・上手中室間	前室割合	奥室割合	図数
鍵座敷	96.7	100.0	54.2	40.0	80.0	82.5	81.7	6.7	70.0	0.0	28.6	47.3	10
	10.5	0.0	41.8	51.6	42.2	3.9	33.7	21.2	48.3	0.0	8.8	8.5	
前座敷	97.1	17.8	88.3	38.8	66.7	5.5	98.8	67.6	40.6	63.2	30.8	27.6	80
	13.0	29.4	20.9	48.4	33.9	20.3	11.2	31.0	48.3	42.5	10.2	6.1	
奥座敷	90.8	100.0	14.1	7.7	82.1	81.9	66.7	5.8	100.0	0.0	24.4	49.0	13
	27.8	0.0	25.3	19.9	37.5	8.9	47.1	20.8	0.0	0.0	7.4	8.3	
中座敷	100.0	25.0	0.0	100.0	90.0	0.0	100.0	49.9	100.0	100.0	26.1	26.7	2
	0.0	35.4	0.0	0.0	14.1	0.0	0.0	23.8	0.0	0.0	5.5	9.4	
合計	96.3	36.1	74.2	36.2	70.3	22.2	93.2	53.8	51.9	50.1	29.7	32.1	105
	15.3	42.9	36.1	47.3	35.2	36.6	24.0	38.4	49.4	45.9	9.9	10.8	

（上段：平均 下段：標準偏差 図数以外の単位は%）

前面や側面がかなり閉鎖的なために奥座敷に判別されたのが、10図中4図（民番104, 213, 298, 300）もあった。民番213（岩手郡西根町伊藤家）の前室は、デゴウシと呼ばれているが、西根町教育委員会編（1986 p.6）によると、デゴウシは本来は座敷に当たるものだが、実質は閉鎖的なネベヤであると言う。また、民番298と300は紫波郡矢巾町にあるが、矢巾町史編纂委員会編（1985 p.918）によると、町内民家の特徴として、前室の「下座敷は寝室に使われることが多く、普段は閉めたままであった」とある。

このように、2×2型の場合と同様に、盛岡市周辺の岩手郡や紫波郡では、鍵座敷と奥座敷の違いはあまり明確ではない。特に室呼称からは鍵座敷と判断される場合でも、必ずしも3室すべてが座敷というわけではなく、実際の生活上はもちろん間取り構造的にも実質的には前室が寝室であるものが少なくないと考えられる。

### ③座敷タイプの地域的展開

座敷タイプの地域的分布を見ると（後出の表26参照）、鍵座敷と奥座敷の分布はほぼ重なっており、旧南部藩領の二戸郡、岩手郡、紫波郡に広がっている。2×2型の分布と比較すると、奥座敷が特に紫波郡に多く分布している点は同じだが、鍵座敷の分布域はかなり狭まっている。

前座敷は、旧南部藩領の稗貫郡および和賀郡や、気仙郡を除く旧伊達藩領に広く分布し、2×2型の前座敷とほぼ同様の分布パターンを示している。ただし、2×3型の前座敷は旧南部藩領北部ではかなり少ない点が異なっている。また、稗貫郡には一部中座敷もみられる。

以上のように、地域的分布を見ても、鍵座敷および奥座敷と前座敷および中座敷とは系統が異なる可能性が高い。

## (3) 間取りタイプ

### ①間取りタイプとその地域的展開

2つの広間タイプと4つの座敷タイプの組み合わせにより、8つの間取りタイプが考えられる。実際、室呼称に基づいた間取りタイプ分類を行った結果でも、8つの間取りタイプが出現した。が、表26に示したように、奥広間が151図中106図と全体の約7割を占め、その中でも前座敷（101図）が大半を占めており、他の座敷タイプはいずれも例外的な存在であることが分かる。

表26 2×3型の旧郡別間取りタイプ別間取り図数

	前広間 鍵座敷	前広間 前座敷	前広間 奥座敷	前広間 中座敷	奥広間 鍵座敷	奥広間 前座敷	奥広間 奥座敷	奥広間 中座敷	合計
九戸郡	0	1	0	0	0	0	0	0	1
二戸郡	7	2	4	1	0	0	0	0	14
岩手郡	6	0	4	0	0	0	0	0	10
紫波郡	3	0	14	0	1	0	1	0	19
上閉伊郡	0	1	0	0	0	1	0	0	2
稗貫郡	0	0	0	0	0	11	0	3	14
和賀郡	0	0	0	0	0	10	0	0	10
江刺郡	0	0	0	0	0	5	0	0	5
胆沢郡	0	0	0	0	0	38	0	0	38
西磐井郡	0	2	0	0	0	9	0	0	11
東磐井郡	0	0	0	0	0	27	0	0	27
合計	16	6	22	1	1	101	1	3	151

一方、前広間は奥広間の約3割の45図にすぎず、その座敷タイプは奥座敷（22図）と鍵座敷（16図）にほぼ二分され、前座敷（5図）と中座敷（1図）はかなり少ない。2×2型では、前広間奥座敷は9図のみで、前広間タイプ298図の3%しか占めておらず、大半が鍵座敷であるのとは対照的である。

表26で間取りタイプ別の分布を見ると、ほぼ南北に前広間地域と奥広間地域に二分さ

れることが分かる。前広間が広がる二戸郡、岩手郡、紫波郡では、前述したように鍵座敷と奥座敷が混在している。一方、奥広間は2×2型の場合と同様に、旧南部藩領の稗貫郡および和賀郡から旧伊達藩領の胆沢郡、西・東磐井郡にかけて広がっているが、ほとんどが前座敷で、2×2型では少なからずみられた鍵座敷はほとんどない<sup>18)</sup>。つまり、奥広間タイプでは、上手列奥に寝室を取る前座敷が基本形で、2×2型では形式的に上手2室を座敷にする鍵座敷の場合もあるが、上手列を3室化する場合は、実質的にも形式的にも1室は寝室を設ける必要があることを示唆していると言えよう。

なお、2×2型では前広間と奥広間が混在する上閉伊郡では、2×3型がほとんど見られない。また、前述した3×2型や後述する3×3型も、ほとんど見られない。上閉伊郡では、新たな寝室や座敷等の創出は、2列型における多室化ではなく、3列化によって行われているためである。3列型間取りについては、稿を改めて論じてみたい。

## ②構造図の間取りのクラスター分析

一部開放度の値が不明な1図を除いた104構造図を対象に、室開放度等の17変数を用いて、間取りのクラスター分析を行った。その結果、間取りタイプとクラスターとの関係を示した表27からわかるように、奥広間タイプ（第1および第2クラスター）と前広間タイプ（第3クラスター）に大きく二分され、室呼称による広間タイプと所属クラスターが異なるのは、わずか4図（民番30, 705, 731, 804）にすぎなかった。

奥広間タイプは、いずれもほとんどが前室と中室が座敷の前座敷であるが、さらに喰違い型（第1クラスター）と田の字型（第2クラスター）に細分された。各クラスターの17変数の平均値等を示した表28を見ると、第2クラスターは、下手前室割合と上手前室割合が41～43%とほぼ同じで、下手列の奥の広間と前の次の間および上手列の2座敷の4室がほぼ田の字型に配置されているため、下手列前室と上手列中室の座敷とは直接は往来できない。一方、第1クラスターは、上手列前室の座敷が小さく（前室割合22.5%）、上記4室の配置が食い違っており、下手列前室と上手列中室は直接往来できる（室開放度77.9%）。しかし、奥広間と中室の座敷の間は、田の字型ほど開放的ではない。また、共に2座敷の前座敷タイプだが、喰違い型では前室より中室の座敷の方が2倍以上広いのに対して、田の字型では前室の座敷の方が多少広く、各座敷の呼称や床の間の位置および向きにも違いがみられる。地域的にも田の字型は胆沢郡を中心に胆沢郡以北の奥広間地域に広がっているが、喰違い型はそれより南部の西・東磐井郡を中心として、奥広間地域全域に広がっているという違いがある。

一方、前広間タイプの第3クラスターは、さらにクラスター数を増やしても、座敷タイプ別のクラスターに分かれることはなかった。つまり、判別分析等の結果からも明らかなように、

表27 2×3型の間取りタイプとクラスターとの関係

間取りタイプ	第1クラスター	第2クラスター	第3クラスター	合計
前広間鍵座敷	0	0	10	10
前広間前座敷	2	0	0	2
前広間奥座敷	0	0	13	13
奥広間前座敷	39	36	2	77
奥広間中座敷	2	0	0	2
合計	43	36	25	104

18) 奥広間鍵座敷が紫波郡にのみ1図（民番336 紫波町武田家）ある。その間取り図は形態図で、上手列に座敷、中座敷、小座敷の3座敷が存在するが、座敷と中座敷の側面には縁側が付くのに対し、小座敷には付いていない。同じ紫波町に位置する高橋家（民番332）は2×3型の奥広間奥座敷で、武田家の小座敷に当たる室が寝室になっている。しかし、両者の間取り形態はほぼ同じであるため、武田家の小座敷も実質的には寝室と考えられる。とすると、2×3型の奥広間鍵座敷は、実際には存在しないことになる。

表28 2×3型のクラスター別室開放度と室割合

クラスター	下手前室・奥室間	下手前室前面	下手前室側面	下手奥室側面	前室相互	奥室相互	下手前室・上手中室間	下手奥室・上手中室間	上手前室・中室間
1	96.7	90.6	86.5	82.3	97.7	70.2	77.9	49.1	99.1
	9.1	16.7	25.2	18.9	15.2	30.7	39.5	44.5	4.3
2	99.4	98.9	98.6	88.5	100.0	65.6	0.0	87.4	99.4
	3.3	4.6	8.3	17.2	0.0	31.4	0.0	24.5	3.3
3	77.7	88.6	76.6	35.8	75.4	9.6	80.0	0.0	87.9
	23.0	14.0	25.7	39.9	40.6	23.5	40.8	0.0	29.1
合計	93.1	93.0	88.3	73.3	93.1	54.0	51.4	50.5	96.5
	15.4	13.7	22.6	32.7	24.1	38.5	49.4	45.9	15.2

クラスター	上手中室・奥室間	上手前室前面	上手前室側面	上手中室側面	上手前室側面	下手前室割合	上手前室割合	上手奥室割合	図数
1	12.6	78.0	40.7	68.4	3.9	45.1	22.5	28.2	43
	26.6	29.7	49.1	27.5	18.1	5.5	4.6	5.8	
2	20.4	97.8	38.9	66.7	7.6	42.9	40.9	26.6	36
	27.6	6.4	49.4	41.4	23.0	3.8	4.2	6.6	
3	99.2	35.0	26.0	79.7	75.6	66.4	26.3	46.7	25
	4.0	39.4	41.4	37.6	23.7	10.1	8.1	9.6	
合計	36.1	74.5	36.5	70.5	22.4	49.5	29.8	32.1	104
	42.9	36.2	47.4	35.3	36.8	11.6	9.9	10.9	

(上段：平均 下段：標準偏差 図数以外の単位は%)

前広間地域においては、鍵座敷と奥座敷の間取り構造的な違いはあまり無いと考えられる

### ③ 2×3型間取りの成立と発展

2×3型の間取り図は151図で、3×2型の29図と比べてかなり多く、3室化は下手列よりも上手列でより進行したことを示している。その中でも奥広間前座敷が特に多く、奥広間タイプの95%、2×3型全体でも約2/3を占めている。

2×3型の間取りは、基本的には2×2型の上手列に新たに座敷または寝室を付加することで生じる。前広間タイプの2×2型の場合、その86%を占める鍵座敷では、寝室1室、座敷2室を備えているため、上手列を3室化して新たな座敷または寝室を設ける必要性はあまり高くない。それに対して、奥広間タイプの2×2型の場合、その74%を占める前座敷タイプは寝室、座敷共に1室で、鍵座敷タイプでは寝室がないため、新たな座敷や寝室を設けるためには、上手列を3室化する必要性が高くなる。このため、特に奥広間タイプにおいて、上手列の3室化が進み、2座敷1寝室の構成となる2×3型の奥広間前座敷が多数出現したと考えられる。

ただし、実際に2×2型間取りから2×3型の奥広間前座敷に移行した事例は、1例しか認められなかった。稗貫郡花巻市佐藤家の復原図(民番520-2)は2×2型で、上手列前室がカミザシキ、奥室がカクレザシキ(ナンド)の奥広間前座敷だが、現状図(民番520-1)では、奥にヒヤを増築し、中室となった元のナンドはザシキに変わっている。2×3型の図数が多い割に、2×2型からの移行事例が極めて少ないのは、当初から2×3型として建てられたものが多いためであろう。

一方、前広間タイプにも少ないが2×3型が44図あり、その座敷タイプは奥座敷(22図)と鍵座敷(16図)が多い。2×3型の前広間奥座敷は、2×2型の前広間鍵座敷の座敷の前側に新たに寝室を設けることでも成立しうるが、それよりは2×2型の前広間奥座敷の座敷を2室

表29 農家階層別間取り型

階層 \ 間取り型	(図数)					(構成比)				
	2×2型	3×2型	2×3型	3×3型	合計	2×2型	3×2型	2×3型	3×3型	合計
上層	28	4	30	15	77	36.4%	5.2%	39.0%	19.5%	100.0%
中層	48	7	20	11	86	55.8%	8.1%	23.3%	12.8%	100.0%
下層	26	0	3	1	30	86.7%	0.0%	10.0%	3.3%	100.0%
不明	316	18	98	45	477	66.2%	3.8%	20.5%	9.4%	100.0%
合計	418	29	151	72	670	62.4%	4.3%	22.5%	10.7%	100.0%

化することで成立したと考える方が自然であろう。つまり、2×2型の奥広間前座敷の場合と同様に、2×2型の前広間奥座敷でも、2座敷化に対応して3室化が進行したと考えられる。2×2型の前広間奥座敷や奥座敷系鍵座敷の分布と同様に、2×3型の前広間奥座敷も紫波郡を中心に分布していることがその現れと言えよう。また、同様に2×3型の前広間鍵座敷も、2×2型の前広間鍵座敷から発展したものと考えられる。

このように見てくると、広間タイプにかかわらず、寝室よりも座敷の必要性の高まり、つまり座敷2室化（鍵座敷の場合は座敷3室化）の欲求が上手列の3室化を促したと言える。とすると、上手列の3室化と農家の階層との関係が推測される。そこで、表29に間取りの型と農家階層との関係を示した。農家階層は、間取り図の出典の記述から、肝入り、本家、庄屋、上層等を「上層」、自作、普通等を「中層」、小作、名子等を「下層」と判断した。階層に関する記述が無い場合は、「不明」に分類した。表を見ると、「下層」では2×2型が2列型の86.7%を占めているが、「中層」、「上層」となるにつれてその割合は減少し、「上層」では36.4%にすぎない。逆に上手列を3室化した2×3型と3×3型を合わせた割合は、「下層」では13.3%、「中層」36.0%、「上層」では58.4%と上昇している。一方、下手列を3室化した割合は、「下層」3.3%、「中層」20.9%、「上層」24.7%で、「中層」と「上層」の割合に差はほとんどなく、その割合もさほど高くはない。つまり、農家階層が上昇するほど、2座敷化することで自らの格式を示そうとしたため、上手列の3室化が進行したと考えられる。

## 9. 3×3型間取りの成立・発展と地域的展開

### (1) 広間タイプ

#### ①室呼称に基づく広間タイプ

下手列の室呼称から判断した3×3型の広間タイプ別の室呼称を、表30に示した。全72図のうち、中広間が66図で91.7%を占め、前広間は4図、奥広間は2図にすぎない。前述した3×2型の場合と同様に、下手列が3室の場合の広間タイプは、中広間が大半を占めている。

中広間と判断した66図の中室呼称は、オカミが52図で最も多いが、「ジョイ」(7図)やチャノマ(5図)もある。前室呼称は、ナカマが56図で大半を占めている。奥室呼称で最も多いのは「カッテ」の14図で、ナンドの12図がそれに次ぐ。これら以外ではキタヒラキ、ウラザシキ、ネットコ等多様な呼称がつけられているが<sup>19)</sup>、ほとんどが寝室・収納室である。

19) 民番659(胆沢郡胆沢町高橋家)の奥室の呼称はオカミだが、中室の呼称もオカミで、広さは中室の方が約3倍の広さであるため、民番659は中広間と判断した。

表30 3×3型の広間タイプ別室呼称

## ①下手列前室

室呼称	前広間	奥広間	中広間	合計
ジョイ	3	0	0	3
チャノマ	0	0	3	3
ナカマ	0	2	56	58
ネマ等	0	0	1	1
ザシキ	0	0	1	1
その他	1	0	2	3
不明	0	0	3	3
合計	4	2	66	72

(注)「ジョイ」は、ジョウイを含む

## ②下手列中室

室呼称	前広間	奥広間	中広間	合計
オカミ	0	1	52	53
ジョイ	1	0	7	8
チャノマ	0	0	5	5
その他	1	0	0	1
不明	2	1	2	5
合計	4	2	66	72

(注)「オカミ」は、チイセイオカミを含む  
「ジョイ」は、ジョウイを含む

## ③下手列奥室

室呼称	前広間	奥広間	中広間	合計
ナンド	1	0	12	13
ネマ	2	0	7	9
カッテ	0	0	14	14
オカミ	0	2	1	3
その他	1	0	14	15
不明	0	0	18	18
合計	4	2	66	72

(注)「カッテ」は、イリガッテを含む  
「ネマ」は、ネベヤ、ネドコ等を含む

前広間タイプの前室の呼称は、3図が「ジョイ」で、1図がイマであった。そのうち九戸郡にある2図(民番38, 45)は、中室・奥室の両者が寝室・収納室だが、岩手郡と紫波郡にある2図(民番261, 320)は奥室のみが寝室・収納室である。このうち民番261(盛岡市佐藤家)は、中室が上ジョウイ、前室がジョウイで、後者の方が2倍広く、元々の広間を二分したような形態となっている。このような形態の間取りは、前出の3×2型の民番245(岩手郡玉山村堀江家)にも見られる。

奥広間と判断した2図(民番640-1, 640-2)は、胆沢郡胆沢町佐々木家の間取り図で、室呼称は奥がオカミ、中はチイセイオカミ、前はナカマである。胆沢町には下手列が3室の間取り図が多数存在するが、この2図以外はすべて中広間であり、下手列3室の奥広間は極めて特殊と言える。

## ②構造図の下手列の室開放度と判別分析

3×3型の45の構造図を室呼称に基づいて3つの広間タイプに分類し、各広間タイプの下手列3室に関わる11の開放度と前室および奥室の相対的広さの計13変数について、その平均値と標準偏差を表31に示した。表を見ると明らかのように、前室および奥室の相対的広さは広間タイプによって異なるが、室開放度については奥広間タイプと中広間タイプではほとんど差が無い一方で、これら2者と前広間タイプとの違いが際立っている。特に前室・中広間、中室・奥室間、奥室側面、奥室相互の室開放度では、いずれも前広間タイプの方が有意に閉鎖的であ

表31 3×3型構造図の広間タイプ別下手列の室開放度および室割合

広間タイプ	前室・中室間	中室・奥室間	前室前面	前室側面	中室側面	奥室側面	前室相互	中室相互	奥室相互	下手前室・上手中室間	下手中室・上手奥室間	前室割合	奥室割合	図数
前広間	70.8	38.3	95.0	95.8	81.3	25.0	95.0	25.0	0.0	75.0	50.0	48.2	20.0	4
	34.4	14.5	10.0	8.4	23.9	50.0	10.0	50.0	0.0	50.0	57.7	9.4	3.6	
奥広間	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	83.5	100.0	50.0	67.0	0.0	0.0	44.4	33.3	2
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	23.3	0.0	70.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
中広間	97.8	89.9	97.8	93.5	89.6	85.5	94.4	56.5	83.6	28.5	15.4	37.7	23.0	39
	5.9	24.5	9.6	20.2	17.3	28.9	18.9	42.5	32.5	45.5	36.6	5.2	5.0	
合計	95.5	85.8	97.7	94.0	89.3	80.0	94.7	53.4	75.2	31.3	17.8	38.9	23.2	44
	13.1	27.6	9.3	18.9	17.6	34.7	17.8	43.9	38.7	46.7	38.7	6.4	5.3	

(注) 変数によっては、開放度が不明な図が1図ある。(上段:平均 下段:標準偏差 図数以外の単位は%)

る。前広間タイプも中広間タイプも共に奥室は寝室・収納室であるが、奥室の閉鎖性は異なっており、中広間タイプの奥室は明らかに開放的である。

次に、45の構造図のうち、一部の室開放度が不明な2図を除いて、上記13変数を独立変数、広間位置を目的変数（グループ）とする判別分析を行った。その結果、中広間37図、前広間4図、奥広間2図はすべて正しく予測され、一致率は100%であった。

### ③広間タイプの地域的展開

3×3型72図の旧郡別地域的分布を見ると（後出の表32参照）、中広間は奥広間地域である旧伊達藩領内の胆沢郡（34図）と東磐井郡（21図）に集中して分布しているが、江刺郡や西磐井郡ではほとんど見られない。また、旧南部藩領の奥広間地域である上閉伊郡や稗貫郡にもまったく見られない。が、旧南部藩領の前広間地域には、数は少ないが分散的に分布している。3×2型の分布と比較すると、マクロ的には類似しているが、3×2型の中広間が旧伊達藩領でも東磐井郡に集中しているのに対し、3×3型では胆沢郡（特に胆沢町）にも集中分布している点が異なっている。

中広間タイプ66図の室呼称を見ると、旧伊達藩領の56図では前室はすべてがナカマで、中室は51図がオカミで、チャノマの5図が東磐井郡にある。奥室呼称では、胆沢郡ではナンドが最も多いが、東磐井郡ではほとんどがカッテで、東磐井郡の下手列の室呼称は、3×2型と同様に「カッテ/オカミ/ナカマ」となっている。一方、旧南部藩領の中広間の室呼称は、不明な図を除けばすべて「ジョイ」で、前広間タイプの広間呼称と同じである。

なお、前広間タイプと奥広間タイプは数が少なく、各々2×2型の前広間地域、奥広間地域内に分散している。

## (2) 座敷タイプ

### ①室呼称に基づく座敷タイプ

3×3型72図の上手列3室の座敷タイプを室呼称から判断すると、最も多いのが前座敷で60図あった。座敷が1室のみの1図（民番325<sup>20)</sup>を除けば、他は座敷が前室と中室の2室で、奥室が寝室のタイプである。前室の呼称は8割が「デイ」（コデイ等を含む）で、2×3型では比較的多かったキバヤザシキが付く呼称は少ない。中室の呼称は、「トコマ」（トコノマを含む：20図）と「デイ」（17図）が多く、キバヤ「ザシキ」（オモテザシキ等を含む）は少ない。奥室はほとんどがナンドであった。

次に、室呼称から3室とも座敷である鍵座敷と判断したのが7図であった。室呼称が不明な室を除けば、ほとんどの室はザシキが付く呼称であった。ただし、民番218（岩手郡西根町佐々木家）の前室のデゴウシは、前述したように本来は座敷に当たるが、実質は寝室であると言う。西根町教育委員会（1986 p.7）によると、西根町では上手に上下に分かれたザシキ（カミザシキとシタザシキ）があり、さらにシタザシキの表側に隠居年寄の室であるデゴウシという小ベヤを、下屋として出す場合とシタザシキを二つに分けてつくる場合<sup>21)</sup>があり、デゴウシはコウシマドがあるだけの閉鎖的な小ベヤで隠居年寄のへやになっている事が多いと述べられている。が、民番218は呼称を重視して、とりあえず鍵座敷に分類した。

20) 民番325（紫波郡紫波町工藤家）の中室の呼称は不明だが、前室との間に壁があるため、座敷は前室1室のみと判断した。

21) その具体的な例は、前出の2×3型の民番213（西根町伊藤家）である。

また、奥座敷と判断したのは5図だが、そのうち座敷が奥1室のみで中室と前室が共に寝室なのが1図（民番261）で、残り4図は奥2室が座敷で前1室が寝室・収納室であった。

## ②構造図の上手列の判別分析

3×3型の43構造図を対象に、上手列3室に関わる室開放度11変数と前室および奥室の相対的広さの2変数の計13変数を独立変数、座敷タイプを目的変数（グループ）とする判別分析を行った。その結果はすべて正確に予測され、前述したデゴウシがある民番218も奥座敷とは予測されなかった。民番218のデゴウシは、前出の判別分析の結果寝室と判断された2×3型の民番213のデゴウシほどは、閉鎖的ではなかったためと考えられる。いずれにせよ、デゴウシは座敷と寝室の中間的性格を持った室と言えよう。

なお、座敷タイプ別の室開放度等の特徴については、2×3型の場合と基本的に同じなので、省略する。

## ③座敷タイプの地域的展開

鍵座敷（7図）と奥座敷（5図）は図数が少ないが、共に旧南部藩領内陸部に分布しており（後出の表32参照）、その分布パターンは2×3型の座敷タイプと類似している。

一方、多数を占める前座敷は、2×3型の前座敷が分布する地域の中でも、胆沢郡（36図中33図が胆沢町）と東磐井郡（21図）に集中しており、旧南部藩領の稗貫郡や和賀郡、旧伊達藩領の江刺郡や西磐井郡ではほとんどみられない。また、胆沢郡と東磐井郡とは、座敷の室呼称が異なっている。胆沢郡では、前室は36図すべてがデイで、中室はトコマ・トコノマ（20図）とキバ（8図）が多い。それに対して東磐井郡では、前室はデイ（11図）とキバ（7図）が多く、中室ではデイ（7図）、オオデイ（6図）をはじめとしてデイが付く図が18図を占めている。また、室の広さを比べると、胆沢郡では前室の方が広いのに対し、東磐井郡では明らかに中室の方が広い。つまり、両地域共に「デイ」の方がキバやトコマ等よりも広いが、両者の配置位置は前後が逆になっている。菊地（2016）の「きば」の項（p.15）には、「胆沢区（筆者注：旧胆沢町）から金ヶ崎町にかけては、かみでの奥座敷を称する<sup>22)</sup>。胆沢区から衣川区・平泉・一関市にかけては、かみて2座敷の場合は表座敷をきばと称する。きばが狭く、奥座敷が広い。」とあることから、平泉町や一関市を含む西磐井郡も東磐井郡と同じ状況だと推測される。ただし、座敷の床の間の有無を見ると、座敷2室ある前座敷タイプの59図中、床の間がある56図ではすべて中室にある。前室にも床の間があるのが5図あるが、2座敷で前室のみに床の間があるのは一つもない。このことから、胆沢郡と東磐井郡の2座敷の前座敷タイプでは、座敷の呼称と室の広さは異なっているものの、中室が正座敷と見なして良いであろう。

## (3) 間取りタイプ

### ①間取りタイプとその地域的展開

3つの広間タイプと3つの座敷タイプの組み合わせにより、9つの間取りタイプの可能性が

22) 菊地の言う奥座敷とは、前室にある座敷に対して、その奥にある座敷の意であり、筆者の言う座敷の前に寝室等を置く奥座敷とは異なる。また、胆沢郡も含めて、上手列が2室であれ3室であれ、奥室の呼称がキバである図は1つもない。つまり、菊地の言う奥座敷とは、上手列3室の前座敷タイプの中室の座敷のことである。



あるが、実際に認められたのは6タイプで、その中でも中広間前座敷が全72図の約80%にあたる58図を占め、他のタイプは2～5図にすぎない。

これらの地域的分布を示した表32を見ると、中広間前座敷の大半は旧伊達藩領の胆沢郡と東磐井郡に集中していることがわかる。これらの地域の2×2型および2×3型では、奥広間前座敷が卓越していることから、下手列2室の奥広間が中広間とその奥のカッテヤナンド等に二分された、または元の奥広間の奥にカッテ等を付加することで、3×3型の中広間前座敷が生まれたと考えられる。

一方、旧南部藩領内にも中広間が多少あるが、鍵座敷が5図、奥座敷が3図で、前座敷は1図（民番325）のみである。これらが存在する九戸郡、二戸郡、岩手郡、紫波郡は、2×2型では前広間鍵座敷が卓越し、2×3型では前広間鍵座敷と前広間奥座敷が混在する地域である。このことから、これらの地域の3×3型の中広間は、前広間タイプから生まれた可能性が高い。ただし、前広間と奥広間が混在する紫波町にある中広間前座敷の民番325については、後で詳述する。

また、旧南部藩領内には前広間鍵座敷と前広間奥座敷も各2図あるが、中広間タイプを含めても、旧南部藩領の前広間地域では3×3型が少ない。3×2型でも同じような分布状況であったことから、下手列の3室化は、前広間地域ではあまり一般的ではなかったと言える。

表32 3×3型の旧郡別間取りタイプ別間取り図数

旧郡	前広間 鍵座敷	前広間 奥座敷	奥広間 前座敷	中広間 鍵座敷	中広間 前座敷	中広間 奥座敷	合計
九戸郡	2	0	0	2	0	0	4
二戸郡	0	0	0	0	0	2	2
岩手郡	0	1	0	2	0	0	3
紫波郡	0	1	0	1	1	1	4
江刺郡	0	0	0	0	1	0	1
胆沢郡	0	0	2	0	34	0	36
西磐井郡	0	0	0	0	1	0	1
東磐井郡	0	0	0	0	21	0	21
合計	2	2	2	5	58	3	72

②構造図の間取りのクラスター分析

3×3型の構造図45図のうち、一部開放度が不明な2図を除いた43図について、下手列に関わる8変数、上手列に関わる8変数、下手列と上手列間の開放度5変数（該当する9変数のうち、値のほとんどまたはすべてが0%の4変数を除く）の計21変数を用いて、クラスター分析を行った。その結果、43図は2つの大きなクラスターに分かれた。表33に、室呼称に基づく間取りタイプとクラスターの関係を示した。第1クラスターには、大多数の中広間前座敷と奥広間前座敷2図の計34図が含まれ、第2クラスターには、主に他の間取り（特に鍵座敷タイプと奥座敷タイプ）が含まれている。表34には、各クラスターの室開放度などの平均値等を示した。

2つのクラスターの大きな違いの一つは、上手列奥室の閉鎖性にある。第1クラスターは、前座敷で奥室は寝室となっているため、側面や前の中室との間はほとんど閉鎖されており、下手列奥室との間（奥室相互）のみが開放的である。それに対して、第2クラスターは、鍵座敷と奥座敷が多く、上手列奥の座敷と下手列奥室の寝室との間（奥室相互）は閉鎖的だが、奥室の座敷の側面の開放度は62.2%、中室との開放度は92.2%と高い。もう一つの大きな違いは、下手列奥室の閉鎖性にある。第1クラスターの

表33 3×3型の間取りタイプとクラスターとの関係

間取りタイプ	第1クラ スター	第2クラ スター	合計
前広間鍵座敷	0	2	2
前広間奥座敷	0	2	2
奥広間前座敷	2	0	2
中広間鍵座敷	0	2	2
中広間前座敷	32	3	35
合計	34	9	43

表34 3×3型のクラスター別室開放度と室割合

クラスター	下手前室・中室間	下手中室・奥室間	下手前室前面	下手前室側面	下手中室側面	下手奥室側面	前室相互	中室相互	奥室相互	下手前室・上手中室間	下手中室・上手奥室間
1	97.4	90.4	98.5	96.8	88.1	88.2	98.0	53.8	92.9	23.8	0.0
	6.3	24.1	8.6	13.2	18.1	25.5	8.0	42.3	14.9	42.9	0.0
2	87.0	65.1	94.1	84.8	91.7	50.0	86.7	55.6	16.7	55.6	77.8
	26.1	34.3	12.1	32.8	17.7	50.0	33.2	52.7	35.4	52.7	44.1
合計	95.3	85.1	97.6	94.3	88.8	80.2	95.7	54.2	77.0	30.5	16.3
	13.4	28.1	9.4	19.1	17.9	35.1	16.8	44.0	37.4	46.3	37.4
クラスター	上手前室・中室間	上手中室・奥室間	上手前室前面	上手前室側面	上手中室側面	上手奥室側面	下手前室割合	下手奥室割合	上手前室割合	上手奥室割合	図数
1	100.0	6.6	93.1	54.2	68.4	10.8	38.6	23.3	31.7	23.7	34
	0.0	16.3	16.8	48.6	26.6	30.4	4.3	5.6	8.7	5.3	
2	73.9	92.2	76.9	48.4	75.6	62.2	40.8	22.7	27.9	42.5	9
	34.6	19.9	34.3	48.4	43.3	36.0	11.9	4.4	9.4	9.3	
合計	94.5	24.5	89.7	53.0	69.9	21.5	39.1	23.2	30.9	27.6	43
	18.5	39.1	22.1	48.0	30.4	37.7	6.5	5.4	8.9	9.9	

(上段：平均 下段：標準偏差 図数以外の単位は%)

下手列奥室は勝手が多く、背面の壁を除く3方向の開放度はいずれも90%前後と開放的なのに対して、第2クラスターの下手列奥室は主に寝室に利用されているため、その3方向の開放度は、土間側が50.0%、中室側が65.1%、上手列側が16.7%と低い。

以上の特徴を2×2型の間取りタイプと比較すると、第1クラスターは奥広間前座敷、第2クラスターは前広間鍵座敷や前広間奥座敷の特徴と共通している。つまり、第1クラスターに含まれる3×3型の中広間前座敷や奥広間前座敷は、2×2型の奥広間前座敷の系統に属すると考えられる。第1クラスターに属する34図はすべて、2×2型では奥広間が卓越する旧伊達藩領の地域に分布していることがそれを裏付けている。

一方、第2クラスターには前広間タイプが4図が含まれているが、中広間タイプも5図含まれている。そのうち中広間鍵座敷の2図(民番218, 341)は、前広間タイプの4図と同様に、旧南部藩領の前広間地域に分布している。民番218(岩手郡西根町佐々木家)の中広間の前室はゲンカン・ネマ、奥室はネマ・ナンドとなっているが、西根町内の他の2列型の間取り図全10図は、すべて前広間タイプである。また、中広間の前面にゲンカンが配置され、前述したように上手列前室にはデゴウシがある。これらの室は下屋として出したものと考えれば、佐々木家も元は前広間だった可能性がある。次に、民番341(紫波郡紫波町藤沼家)のジョイは中室にあるが、前室のチャノマの方が2倍近く広い。また、紫波町教育委員会編(1989 p.17)によると、藤沼家のジョイは、「上居」の意で、主人の部屋でかつ入室できるのは親と息子のみであったという。つまり、民番341は室呼称から中広間と判断したが、実質的にも間取り構造的にも前広間タイプであると考えられる。

また、第2クラスターには、中広間前座敷も3図(民番325, 614, 658)含まれている。民番325(紫波郡紫波町工藤家)は前座敷でも座敷は前室1室のみで、前室(ハカマザシキ)と中室(室呼称は不明)の間には壁があるが、中室と奥室(モノオキ)の間は開放されている。しかし、紫波町教育委員会編(1989 p.28)によると、工藤家では座敷部を改造したため、座敷部が極端に狭く、また下手列前室(チャノマ)と中室(ジョイ)との間には段差があるとい

う。さらに、工藤家が位置する紫波町南東部は、稗貫郡大迫町と接し、奥広間が卓越する地域である。これらのことから、工藤家は奥広間系統の中広間と推定される。次に、旧伊達藩領の胆沢郡にある民番614と658は、共に上手列前室と中室が座敷だが、中室と奥室との間の開放度は各々100%、40%で、完全には閉鎖されておらず、典型的な前座敷タイプとは異なっている。さらに、共に下手列中室の広間と上手列奥室とが直接往来できるという前広間的な特徴も持っていることから、第2クラスターに含まれたと考えられる。が、胆沢郡は明かな奥広間地域であることから、これら2図が前広間の系統とは考えにくく、例外的な存在と言えよう。

以上のことをまとめると、3×3型の間取りは、奥広間前座敷または奥広間系の中広間前座敷（第1クラスター）と、前広間または前広間系中広間の鍵座敷・奥座敷（第2のクラスター）に二分されると言えるだろう。

### ③ 3×3型間取りの成立と発展

3×3型の間取りは、2×2型、3×2型、2×3型間取りを起点として、それらの表側または裏側に増築する、あるいは既存の部屋を二分することで成立したと考えられるが、その結果生まれたのは、ほとんどが奥広間系の中広間前座敷であり、前広間や前広間系の中広間はかなり少ない。奥広間タイプは、前広間タイプとは異なり、広間の前に次の間を取るため、新たな座敷や寝室・収納室の欲求が生じやすい。このため、3×2型や2×3型でも見られたように、特に奥広間タイプで5室以上の多室化が進行したと考えられる。その際、座敷と寝室・収納室が共に2室ずつ必要な場合は、広間の奥に寝室・収納室を置き、前座敷を2室化することで、3×3型の奥広間系の中広間前座敷が生まれてくる。

実際にも、現状図が3×3型でその復原図もある6戸を見ると、それらの現状図はいずれも中広間前座敷で、その復原図は2×3型の奥広間前座敷が4戸で、3×2型の中広間前座敷と2×2型の奥広間鍵座敷が各1戸ずつであった。復原図が2×3型の奥広間前座敷4戸のうち2戸の現状図（民番666-1、682-1）では、背面に増築して下手列も3室化し、他2戸の現状図（民番743-1、766-1）では、元の奥広間を二分して広間の奥に新たな室を創出して3室化し、3×3型に移行している。また、復原図が3×2型の中広間前座敷である1戸の現状図（民番752-1）では、1室だった前座敷を二分し、前座敷を2室化している。復原図が2×2型の奥広間鍵座敷の1戸の現状図（774-1）では、背面に増築して下手列の奥にはカッテ、上手列奥にナンドを置き、中広間前座敷に移行している。

一方、2×2型の前広間タイプの場合には、広間以外に座敷と寝室・収納室が合わせて3室あるので、各々2室必要だとしても計5室で間に合う。また、前広間タイプでは3×2型がかなり少ないことから分かるように、5室化する場合でも下手列ではなく上手列を3室にする方が一般的である。このため、6室となる3×3型でも、前広間タイプはかなり少ないと考えられる。

## 10. 2列型間取りの成立・発展と地域的展開—まとめにかえて—

最後に、以上の分析および考察から導き出された2列型間取りの成立・発展とその地域的展開に関する仮説を、図6にまとめた。なお、図では（旧）土間部は省略し、下手列と上手列のみを表示している。

まず、1列1室型すなわち土間と全広間のみの間取りから就寝機能が分化して、広間と寝室

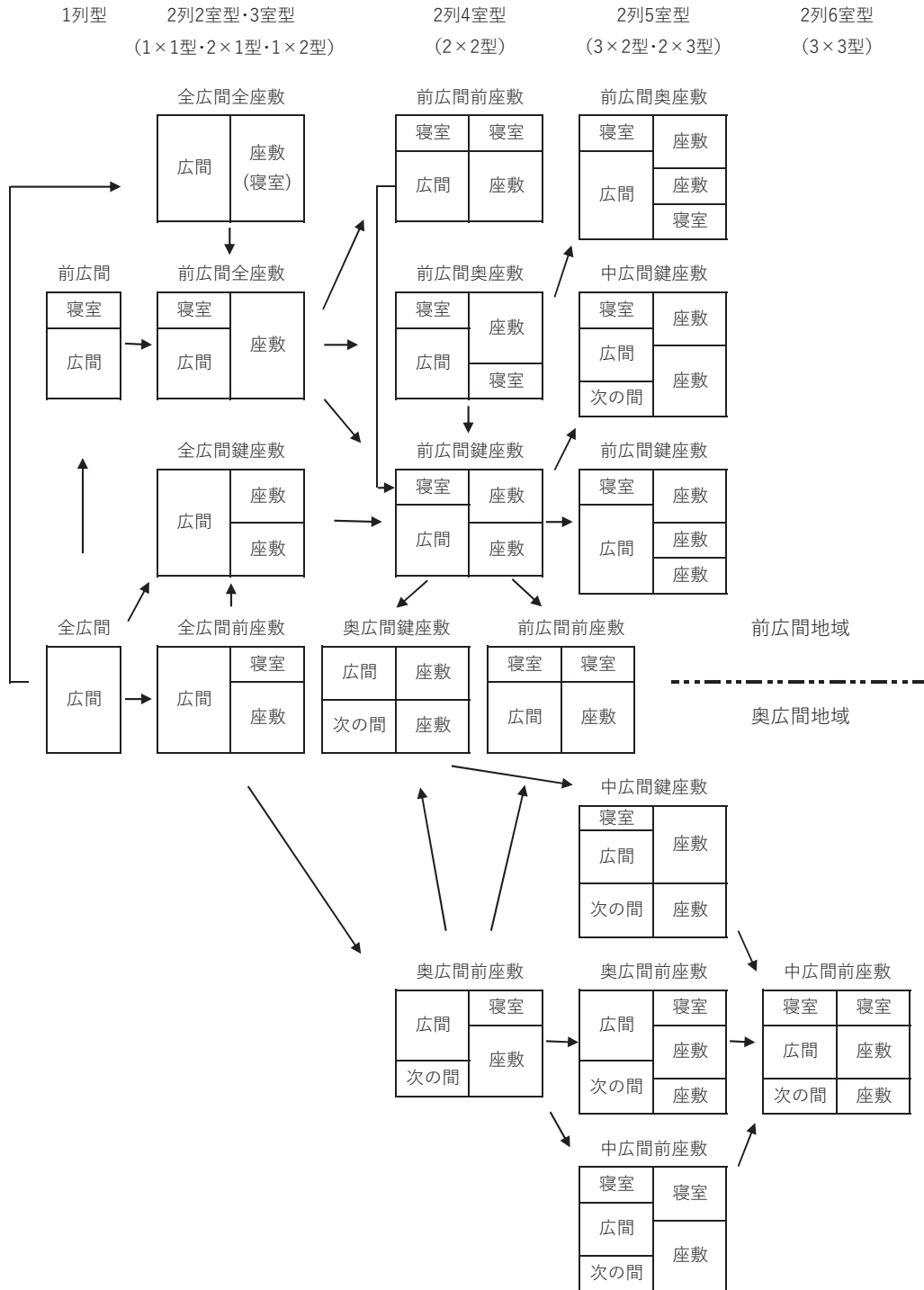


図6 2列型間取りの成立・発展過程

からなる1列2室型間取りが出現した。その際、寝室は広間の奥に置かれたため、原則前広間タイプとなる。

その後、座敷への欲求の高まりに伴って家屋規模が拡大し、広間、寝室、座敷を基本的な構成要素とする2列型間取りが出現してくる。2列型3室間取りでは、広間、寝室、座敷各1室が基本構成となるが、その形成過程は大きく2つに分かれると考えられる。

一つは、1列2室型前広間タイプの上手列に座敷1室を付加し、2×1型の前広間全座敷となる過程である。ただし、前広間全座敷は、1列1室型全広間を起点として、それに上手列を付加した1×1型全広間全座敷（あるいは寝室）から発展した可能性もある。いずれにしてもこれらの間取りタイプは、旧南部藩領の前広間地域に分布しており、2×2型の前広間タイプの間取りのルーツとなったと考えられる。

もう一つの2列3室型間取りの形成過程は、1列1室型全広間に上手列2室を付加し、1×2型のいわゆる広間型三間取りとなる過程である。その典型的間取りは、上手列前に座敷、奥に寝室を配する全広間前座敷である。この間取りは上閉伊郡に集中していることから、この地域に多く見られる2×2型奥広間前座敷のルーツにあたる考えられる。一方、1×2型には、形式的には寝室を欠いた全広間鍵座敷も少なくない。この間取りの分布域は、旧南部藩領の前広間鍵座敷の地域と重なることから、全広間鍵座敷は2×2型の前広間鍵座敷のルーツの一つにあたる考えられる。

2列型でもさらに寝室や座敷への欲求が高まると、2×2型の4室間取りが成立する。その際、広間を下手列のどこに置くかで、前広間タイプと奥広間タイプに分かれる。1列型や2×1型の前広間が卓越している地域では、1×2型の手列を全広間から2室化する場合も含めて、2×2型の前広間タイプに移行していったと考えられる。前広間タイプでは、基本的に前広間の奥は寝室となるので、上手列の座敷タイプは鍵座敷、前座敷、奥座敷のいずれもとりうるが、実際には鍵座敷が圧倒的に多く、前座敷や奥座敷は少ない。しかし、前述したように、これら座敷3タイプの区別は明確ではなく、前座敷系鍵座敷や奥座敷系鍵座敷も少なくない。前座敷系鍵座敷は前座敷も含めて九戸郡、二戸郡を中心に広く分布し、奥座敷系鍵座敷は奥座敷も含めて岩手郡、紫波郡に集中的に分布していることから、前広間地域の中でも元々は前座敷地域と奥座敷地域に分化していたのが、次第に座敷を寝室兼用とすることで形式的には鍵座敷に移行していったという可能性が考えられる。ただし、このことは、前広間地域の1×2型が、鍵座敷にはほぼ限られていることと整合しない<sup>23)</sup>。1×2型の鍵座敷が、2×2型でも鍵座敷となるのは自然としても、2×2型の前座敷または奥座敷へ移行するとは考えにくい。そこで考えられるのは、1×2型の鍵座敷には寝室が無いことから、1×2型の鍵座敷も元は前座敷（あるいは奥座敷）だったという可能性と、2×2型の前広間タイプのルーツは、1×2型の広間型三間取りではなく、1列型や2×1型の前広間タイプであるという可能性のいずれかまたは両方であるが、現時点では推測の域を出ない。

一方、1列型や2×1型は原則として前広間タイプになることや、奥広間地域には1列型や2×1型の間取りがほとんどないことから、2×2型の奥広間タイプは、1×2型の全広間前座敷（広間型三間取り）から発展して成立し、そして生まれたのが奥広間前座敷と考えられ

23) 前述したように、1×2型で最も多いのは前座敷タイプで、その分布は前広間と奥広間が混在している上閉伊郡（特に遠野市）に集中しており、2×2型の前広間前座敷が卓越する九戸郡や一戸郡では1×2型の前座敷はまったく見られない。一方、1×2型の鍵座敷は、前座敷よりも数は少ないが、前広間地域に分散して分布している。また、1×2型の奥座敷はまったく見られない。

る。ただし、1×2型の全広間前座敷は、上閉伊郡（特に遠野市）に集中し、旧伊達藩領内の奥広間地域でも少ないため、奥広間タイプの成立過程についてあまりはっきりしたことは言えない。

また、2×2型の奥広間タイプには鍵座敷もあるが、その分布を見ると、奥広間地域の中でも前広間鍵座敷地域と接している旧南部藩領の上閉伊郡、稗貫郡、和賀郡や、旧伊達藩領の気仙郡や東磐井郡東部に多い。このことは、奥広間鍵座敷が奥広間前座敷と前広間鍵座敷という2つの異なる文化の接触に伴って生まれた中間タイプである可能性を示唆している。また、気仙郡（陸前高田市）と東磐井郡東部（室根村）には、同様に2つの異なる文化の接触に伴って生まれた中間タイプの可能性がある前広間前座敷が見られる。ただし、県北部に見られる前広間前座敷は、これとは間取り構造が異なっており、別系統と見られる。

さらに、2×2型でも奥広間タイプの場合は、寝室と座敷合わせて2室しかない。奥広間前座敷では座敷、寝室共に1室ずつしかないため、座敷かつまたは寝室への欲求が高まると、いずれか一方あるいは両方の2室化が図られることになる。座敷を増やす場合は上手列前側に座敷2室を置く前座敷となり、寝室を増やす場合は奥広間の奥に設けて中広間となる。このようにして生まれたのが、前者の場合は2×3型の奥広間前座敷、後者の場合は3×2型の中広間前座敷で、さらに座敷、寝室敷共に2室化したのが3×3型の中広間前座敷である。いずれのタイプも2×2型の奥広間地域に分布するが、特に2×3型の座敷2室の前座敷タイプは、旧伊達藩領だけでなく旧南部藩領の奥広間地域にも広く広がっている。が、後2者の中広間タイプは、旧伊達藩領内（特に胆沢郡と東磐井郡）にはほぼ限られ、数も前者ほどは多くない。一方、2×2型の前広間タイプの場合でも、奥座敷を2室化したり、鍵座敷を3室化することで、2×3型が生まれたと考えられる。このように寝室よりも座敷の方が2室化（あるいは3室化）の必要性が高かったのは、階層が高い農家ほど家の格式を重視したためと考えられる。

以上、本研究で明らかになったことを簡単にまとめたが、そもそも岩手県域が北半および南東部沿岸地域の前広間地域と、それ以外の南半の奥広間地域とに地域分化した歴史的経緯や空間的過程については不明のままである。しかも、両者の境界は必ずしも旧藩境とは一致していない一方で、室呼称は間取りタイプの違いにかかわらず、明らかに旧藩によって異なっている。このことが何を意味しているのかを含めて、他にも未解明の部分が多く残っている。本研究は、間取りの地域的分布を中心とした地理学的研究であるため、建築史的な分析・考察が不十分であり、今後も上記疑問等に満足いく答えを出すことができないかもしれない。が、今後は2列型に続いて3列型間取りの分析・考察も行い、可能な限り解明を目指していきたい。

## 参考文献

- 阿部和彦・小山祐司・佐藤巧, 1990, 江戸時代中期以降における東北地方民家の発展過程について－規模・間取りの発生的考察－, 東北大学建築学報, 29, pp.1-46
- 加藤良一・平出保之助, 1942, 平泉の民家, 民家, 4-6, pp.53-59
- 金ヶ崎町史編さん委員会編, 2006, 『金ヶ崎町史4 民俗』, 金ヶ崎町
- 川島宙次, 1973, 『滅びゆく民家－間取り・構造・内部』, 主婦と生活社
- 菊地憲夫, 2003, 『岩手の古民家建築』, 胆江日日新聞社
- 菊地憲夫, 2016, 『岩手県胆江地方の民俗建築語彙集』
- 気仙沼市史編さん委員会編, 1994, 『気仙沼市史7』, 宮城県気仙沼市
- 今野幸正, 2008, 『旧南部藩領の消え行く茅葺き「曲り家」』, 川口印刷工業
- 佐藤巧・古建築研究会編, 1999, 『旧佐々木家住宅復原修理報告書』, 北上市教育委員会

- 佐藤巧・古建築研究会編，2005，『旧小野寺家住宅旧星川家住宅旧菅原家住宅復原修理報告書』，北上市教育委員会
- 三陸町史編集委員会編，1988，『三陸町史 第五巻 民俗一般編』，三陸町
- 紫波町教育委員会，1989，『紫波町の古民家』，紫波町教育委員会
- 杉本尚次，1969，北上山地北部の村落と住居，桃山学院大学社会学論集，2-1，pp.80-92
- 高橋宏一，2017，岩手県における伝統的民家についてのデータベースの構築，アルテス リベラレス（岩手大学人文社会科学部紀要），101，pp.1-38
- 東北工業大学建築学科建築史研究室編，1986，『藤沢町の古民家』，藤沢町教育委員会
- 東北大学建築学科佐藤巧研究室編，1978，『岩手県の古民家』，岩手県教育委員会
- 東洋大学民俗研究会編，1983，『晴山の民俗』，東洋大学民俗研究会
- 遠野市教育委員会編，1977，『遠野の曲り家－砂子沢の集落－』，遠野市教育委員会
- 西根町教育委員会，1986，『西根町の古民家・浄屋』，西根町史編さん報告書第3集，西根町教育委員会
- 日本建築学会民家語彙集録部会編，1993，『日本民家語彙解説辞典』，日外アソシエーツ
- 羽柴直人，1993，西和賀地方の近世民家，岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター紀要，13，pp.81-93
- 林大祐・大野敏・野原卓，2012，岩手県九戸郡洋野町に所在する芝棟茅葺民家の残存状況について，日本建築学会関東支部研究報告集，82，pp.697-700
- 文化財保護委員会編，1965，『岩手県の民家』，文化財建造物特別調査報告
- 盛岡友の会編，1935，『田山村の生活』，盛岡友の会
- 矢巾町史編纂委員会編，1985，『矢巾町史，上巻』，矢巾町

### 間取り図掲載文献

- 岩手県教育会編，1935a，『民家の研究－紫波郡，稗貫郡，和賀郡－』，岩手県教育会
- 岩手県教育会編，1935b，『民家の研究－上閉伊郡，二戸郡－』，岩手県教育会
- 小倉強・佐藤巧，1952，大台所庭の農家：仙台藩の例について，日本建築學會研究報告，17，pp.638-641
- 菊地憲夫，2002，『伊藤家住宅解体調査報告書』，金ヶ崎建築設計舎
- 菊地憲夫，2018，『岩手県南旧仙台藩領の民家における柱間寸法の研究』，胆江日日新聞社

付表1 岩手県の伝統的民家（農家）のデータベース（追加分）

民家 番号	旧郡	旧 市町村	氏名	列数	間取 り図	構造・ 形態	民家 形態	勝手	広間	座敷	初出出典
595-2	江刺郡	水沢市	千葉武男	3	復原	構造	直家	右	中	前	菊地(2018)p.318
666-2	胆沢郡	胆沢町	千葉	2	復原	構造	直家	右	奥	前	菊地(2018)p.265
697-2	東磐井郡	前沢町	鈴木幹夫	3	復原	構造	直家	右	奥	鍵	菊地(2018)p.170
845	二戸郡	浄法寺町	川又福蔵	2	現状	形態	内廐	右	前	鍵	岩手県教育会編(1935b)
846	二戸郡	浄法寺町	佐藤正典	2	現状	形態	内廐	右	前	鍵	岩手県教育会編(1935b)
847	二戸郡	浄法寺町	畑山春夫	2	現状	構造	曲家	左	前	鍵	岩手県教育会編(1935b)
848	二戸郡	浄法寺町	吉田義一	3	現状	形態	内廐	右	前	鍵	岩手県教育会編(1935b)
849	紫波郡	都南村	藤原助右エ門	2	現状	形態	曲家	右	前	奥	岩手県教育会編(1935a)
850	紫波郡	都南村	長澤廣治	2	現状	形態	曲家	右	前	奥	岩手県教育会編(1935a)
851	紫波郡	紫波町	佐藤善之助	3	現状	構造	曲家	左	奥	鍵	岩手県教育会編(1935a)
852	紫波郡	紫波町	近谷玄太郎	3	現状	形態	曲家	左	奥	鍵	岩手県教育会編(1935a)
853	上閉伊郡	遠野市	藤川徳助	3	現状	形態	曲家	左	奥	鍵	岩手県教育会編(1935b)
854	稗貫郡	大迫町	某	3	現状	構造	曲家	左	奥	鍵	岩手県教育会編(1935a)
855	稗貫郡	大迫町	某	2	現状	形態	内廐	左	奥	前	岩手県教育会編(1935b)
856	稗貫郡	大迫町	某	2	現状	形態	曲家	左	奥	前	岩手県教育会編(1935b)
857	稗貫郡	花巻市	鎌田志田口	2	現状	形態	外廐	右	奥	前	岩手県教育会編(1935a)
858	稗貫郡	花巻市	菊池源七	2	現状	形態	内廐	右	奥	前	岩手県教育会編(1935a)
859	稗貫郡	花巻市	瀬川藤八	2	現状	形態	内廐	右	奥	鍵	岩手県教育会編(1935a)
860	稗貫郡	花巻市	某	2	現状	形態	内廐	右	奥	前	岩手県教育会編(1935a)
861	稗貫郡	花巻市	某	2	現状	形態	直家	右	奥	鍵	岩手県教育会編(1935a)
862	稗貫郡	花巻市	某	3	現状	構造	内廐	右	奥	鍵	岩手県教育会編(1935a)
863	稗貫郡	花巻市	某	2	現状	構造	内廐	右	奥	鍵	岩手県教育会編(1935a)
864	江刺郡	江刺市	菊池	2	復原	構造	直家	左	中	前	菊地(2018)p.314
865	江刺郡	江刺市	紺野	3	復原	構造	直家	右	中	前	菊地(2018)p.312
866	胆沢郡	水沢市	渡辺	2	復原	構造	直家	右	奥	前	菊地(2018)p.246
867	胆沢郡	胆沢町	石川	2	復原	構造	直家	右	中	前	菊地(2018)p.258
868	胆沢郡	胆沢町	渡辺	2	復原	構造	直家	右	奥	前	菊地(2018)p.263
869	胆沢郡	前沢町	及川	2	復原	構造	直家	右	奥	前	菊地(2018)p.234
870	胆沢郡	前沢町	大内	2	復原	構造	直家	左	奥	前	菊地(2018)p.232
871	東磐井郡	前沢町	小野寺	2	復原	構造	直家	右	奥	前	菊地(2018)p.168
872	胆沢郡	衣川村	高橋	2	復原	構造	直家	右	奥	鍵	菊地(2018)p.223
873	東磐井郡	一関市	吉家	3	復原	構造	直家	右	中	鍵	菊地(2018)p.157
874	東磐井郡	一関市	佐藤	2	復原	構造	直家	左	中	前	菊地(2018)p.152
875	東磐井郡	一関市	佐藤	2	復原	構造	直家	右	中	鍵	菊地(2018)p.154
876	西磐井郡	一関市	佐藤	2	復原	構造	直家	右	中	前	菊地(2018)p.198
877	西磐井郡	花泉町	鶴浦	3	復原	構造	直家	右	奥	鍵	菊地(2018)p.179
878	西磐井郡	花泉町	今野	2	復原	構造	直家	右	奥	前	菊地(2018)p.181
879	東磐井郡	東山町	三澤	2	復原	構造	直家	右	中	前	菊地(2018)p.145
880	東磐井郡	大東町	菊池	3	復原	構造	直家	左	中	前	菊地(2018)p.131
881	東磐井郡	千厩町	畠山	2	復原	構造	直家	右	奥	前	菊地(2018)p.113
882	東磐井郡	千厩町	藤原	2	復原	構造	直家	右	奥	前	菊地(2018)p.111
883	東磐井郡	千厩町	三浦	2	復原	構造	直家	右	中	前	菊地(2018)p.115
884	東磐井郡	室根村	小山	2	復原	構造	直家	左	奥	全	菊地(2018)p.80
885	東磐井郡	室根村	三浦	2	復原	構造	直家	右	前	前	菊地(2018)p.77
886	東磐井郡	藤沢町	小山	3	復原	構造	直家	左	中	前	菊地(2018)p.93
887	東磐井郡	藤沢町	千葉	3	復原	構造	直家	右	中	鍵	菊地(2018)p.96
888	東磐井郡	藤沢町	三浦	2	復原	構造	直家	右	奥	前	菊地(2018)p.91
889	気仙郡	三陸町	坂本	2	復原	構造	直家	左	前	鍵	菊地(2018)p.353
890	気仙郡	住田町	遠藤	2	復原	構造	直家	右	奥	鍵	菊地(2018)p.343
891	気仙郡	住田町	紺野	2	復原	構造	直家	右	奥	鍵	菊地(2018)p.345

(注) 民家形態 外廐：外廐直家 内廐：内廐直家 直家：内廐無し直家



付表2 岩手県の伝統的民家（農家）のデータベース（修正分）

民家番号	修正項目	修正前	修正後	民家番号	修正項目	修正前	修正後
19	初出出典	横浜国立大学建築史	横浜国立大学建築史	427-1	列数	4	3
		建築芸術研究室他編	建築芸術研究室他編	427-2	列数	4	3
26	広間	不明・その他	中広間	436	広間	前広間	奥広間
28	広間	不明・その他	中広間	446-2	広間	全広間	前広間
44-2	座敷	前座敷1	鍵座敷2	479	構造・形態	×	○
104	座敷	不明・その他	鍵座敷3	479	初出出典	同潤会 (1939) p.69	岩手県教育会編 (1935b)
175	座敷	鍵座敷2	前座敷1	500	初出出典	早池根ダム水没地区	早池根ダム水没地区
176	座敷	鍵座敷2	前座敷1			民俗調査グループ編	民俗調査グループ編
179	初出出典	盛岡友の会編 (1935) 民家番号77	盛岡友の会編 (1935) 民家番号79	508	氏名	谷地	高橋正克 (谷地)
181	初出出典	盛岡友の会編 (1935) 民家番号78	盛岡友の会編 (1935) 民家番号80	508	座敷	前座敷2	中座敷
		盛岡友の会編 (1935) 民家番号79	盛岡友の会編 (1935) 民家番号81	514	列数	3	2
182	初出出典	盛岡友の会編 (1935) 民家番号79	盛岡友の会編 (1935) 民家番号81	518	構造・形態	×	○
		盛岡友の会編 (1935) 民家番号80	盛岡友の会編 (1935) 民家番号82	518	初出出典	同潤会 (1939) p.71	岩手県教育会編 (1935a)
183	初出出典	盛岡友の会編 (1935) 民家番号80	盛岡友の会編 (1935) 民家番号82	521	構造・形態	×	○
195	座敷	不明・その他	鍵座敷2	521	初出出典	同潤会 (1939) p.72	岩手県教育会編 (1935a)
205	座敷	奥座敷1	不明・その他			529-2	座敷
213	座敷	奥座敷2	鍵座敷3	537	座敷	鍵座敷3	鍵座敷2
217-2	初出出典	佐藤巧・古建築研究会編	佐藤巧・古建築研究会編 (2005) p.1	544	列数	3	2
218	座敷	奥座敷2	鍵座敷3	545	列数	3	2
223	座敷	奥座敷2	鍵座敷3	549	列数	3	2
238	広間	不明・その他	前広間	549	初出出典	菊池 (2013a) p.74	菊池 (2013a) p.74
259	座敷	奥座敷1	鍵座敷2	587	座敷	前座敷1	鍵座敷2
276	座敷	奥座敷2	鍵座敷3	595-1	民家番号	595	595-1
282	座敷	鍵座敷2	奥座敷2	601	広間	中広間	奥広間
287	座敷	奥座敷2	鍵座敷3	601	初出出典	菊池 (2006) p.30	菊池 (2002) p.1
292	座敷	奥座敷1	鍵座敷2	609	初出出典	菊池 (2009) p.36	菊池 (2009) p.66
298	氏名	阿部源治郎	阿部源治	619	広間	中広間	奥広間
298	座敷	奥座敷2	鍵座敷3	630	間取り図	現状	復原
300	座敷	奥座敷2	鍵座敷3	636	広間	不明・その他	奥広間
311	座敷	不明・その他	鍵座敷2	649	座敷	前座敷1	前座敷2
325	座敷	不明・その他	前座敷1	652	広間	中広間	奥広間
326	座敷	不明・その他	奥座敷1	666-1	民家番号	666	666-1
331	初出出典	岩手県教育会編 (1935) p.1	岩手県教育会編 (1935a) p.1	693	広間	不明・その他	中広間
336	座敷	前座敷1	鍵座敷3	695	旧郡	胆沢郡	東磐井郡
338	広間	前広間	奥広間	695	広間	奥広間	中広間
341	広間	前広間	中広間	697-1	民家番号	697	697-1
349	広間	前広間	中広間	697-1	旧郡	胆沢郡	東磐井郡
354-1	初出出典	文化財建造物保存技術協会編	文化財建造物保存技術協会編 (1980) p.1	697-1	広間	中広間	奥広間
		文化財建造物保存技術協会編	文化財建造物保存技術協会編 (1980) p.1	704	座敷	不明・その他	前座敷2
373	広間	不明・その他	全広間	705	広間	不明・その他	前広間
374	座敷	奥座敷2	鍵座敷3	731	初出出典	菊池 (2014b) p.56	菊池 (2014b) p.56
403	広間	空白	奥広間	738	座敷	前座敷2	前座敷1
406-1	広間	不明・その他	前広間	757	広間	中広間	奥広間
407	列数	2	3	733-2	列数	2	3
416-1	座敷	鍵座敷2	前座敷1	733-2	広間	奥広間	中広間
421	広間	不明・その他	奥広間	777-1	初出出典	小倉 (1955) p.128	小倉・佐藤 (1952) p.640
		不明・その他	奥広間	798-2	広間	奥広間	中広間